

鳥取看護大学・鳥取短期大学

# 看護の人間学(2) : ~「寄り添い」とブーバーの「我と汝」~

著者	荒井 優
雑誌名	鳥取看護大学・鳥取短期大学研究紀要
号	78
ページ	19-28
発行年	2019-01-11
出版者	鳥取看護大学・鳥取短期大学
ISSN	2189-8332
URL	<a href="http://doi.org/10.24793/00000095">http://doi.org/10.24793/00000095</a>



看護の人間学 (2)  
～「寄り添い」とブーバーの「我と汝」～

荒 井 優

Masaru ARAI :  
Anthropology of Nursing  
～ “Yorisoi” and Buber’s “Ich und Du” ～

鳥取看護大学・鳥取短期大学研究紀要 第78号 抜刷

2019年 1月

## 看護の人間学 (2) ～「寄り添い」とブーバーの「我と汝」～

荒 井 優

Masaru ARAI: Anthropology of Nursing ~ “Yorisoi” and Buber’s “Ich und Du” ~

近年、多くの病院や福祉施設で、「寄り添う」看護の重要性が説かれている。「寄り添い」という言葉は非常にニュアンスに富む言葉であるが、それだけに曖昧さを含んでいる。看護において求められる「寄り添い」とはどのような対応なのか？ ブーバーの「我と汝」論にもとづいて「寄り添い」について考える。

キーワード：「寄り添い」 マルティン・ブーバー 「我—汝」「我—それ」「生命」「共存在」「対話」  
キューブラー＝ロス 「死ぬ瞬間」

### 1. はじめに

「寄り添い」という言葉から連想するイメージといえば、男と女、夫と妻のあいだで交わされる親密な、そして思いやりに満ちた無言のやりとりを思い浮かべる。若い男女が恋愛や結婚にあこがれるのも、そこに人生の「幸福」や「癒やし」の大きな可能性が秘められているからであろう。平成26年に内閣府が行った「結婚・家族形成に関する意識調査」<sup>1)</sup>によれば、78%の未婚男女が「結婚したい」と答えている。そして、ある民間が行った「夫婦の幸福度」調査<sup>2)</sup>によれば、夫婦の約80%が「結婚して幸せだ」と答えている。その一方、「結婚は幸せではない」と答えた人は約20%いる。その違いは、いったいどこにあるのであろうか。夫婦の幸福とは何によるのであろうか。

どこにでもありそうなある夫婦の一例を紹介しよう。40歳の男性の話である。「私の妻はしっかりしていて、炊事、洗濯、掃除など、家事全般は実によくやってくれるんですが、私にも細かい要求が多くて、家に帰ってもくつろぐことができません。それ

に、私が何か一言でも不満めいたことを言うと、血相を変えて『こんなに私はあなたのお世話をしているのに、何の文句があるの！』と言って怒ります。そう言われたら、返す言葉もありません。でも、何か違うんですよね…。なぜか、幸せな気分にはなれないんです<sup>3)</sup>。」

家事全般をそつなく熟<sup>こな</sup>す彼の妻は、世間一般の評価からすれば、間違いなく働き者の良き妻である。妻は家事に余念がなく、夫は仕事で頑張って稼いでくる。「仕事」という価値観からすれば、二人とも「働き者」の夫であり妻である。その夫婦のあいだには、何の問題もないように思える。しかし、それにもかかわらず、「なぜか、幸せな気分にはなれない」という。「働く」「仕事をする」という能力において、私たちは社会に貢献し家庭に貢献する。しかし、夫婦間にある「関係」の喜び、「愛情」の喜びは、「仕事」とは別の次元に属する価値観なのではないだろうか。お互いに思いやり、愛し愛される交わりの親密さが、本当の安らぎと癒やしをもたらす。深い幸福感は、互いに「寄り添う」心から引き起こされる信頼感と安心感なのであろう。おそらく、あの夫婦に欠けているのは「寄り添い」なのではないだろう

か。「寄り添い」こそが、二人のあいだに「幸せ」と「癒やし」をもたらすキーポイントなのではないだろうか。

## 2. ブーバーの人間学「我と汝」

「寄り添い」とは何か。それはどのような態度・対応なのか。この問いを根底から哲学的・人間学的に問い返そうとすると、ユダヤ人宗教哲学者、マルティン・ブーバー（Martin Buber, 1878-1965）の「我と汝」論が大きなヒントを与えてくれる。それは、デカルトの「近代的自我」以来、物質的豊かさの追及によって人生の快適と幸福を得ようとする唯物論的な世界観に対して、対極にある唯心論的人間学である。

ブーバーの「我と汝」論は、「愛するとは何か」「幸福とは何か」、そして「生きるとは何か」を考えるための重要なヒントを与えてくれる。そして何よりも、「寄り添い」というかかわり方が他者と共に喜び、共に悲しみ、共に苦しむという、人生における親密なかかわり方、哲学的に言えば（その人と）「共に存在する」（共存 Mit-Sein）という優れて共感的あり方のことを言うのだとすれば、それはまさしくブーバーの「我一汝」関係だと考えてよいであろう。

### （1）「我と汝」の原体験

ブーバーが主書『我と汝』<sup>4)</sup>をドイツのライプツィヒで発表したのは、1923年、ブーバー45歳のときである。その原体験は、彼の少年時代にさかのぼる。『我と汝』の9年後に発表された『対話』<sup>5)</sup>のなかで、ブーバーはそのときの体験について次のように述懐している。

「11歳のときの夏を私は祖父母の農場で過ごしたが、私はそこで……馬小屋にしのびこみ、私の好きな、たくましい胸をした連銭芦毛のうなじをなでたものである。」<sup>6)</sup>

当時、ポーランド、ガリチア地方に住む祖父の農家には、ブーバー少年のお気に入りの馬がいた。少

年はその美しい芦毛のうなじを撫でて可愛がり、馬もブーバー少年を慕ってその身体をすり寄せてきた。この時、ブーバー少年と芦毛の馬は、互いに心通じ合った存在として、脈動する生命の息吹を感じ合っていた。ブーバー少年は馬をとおして「我と汝」の原体験を持った。それは、少年にとっても馬にとっても、癒しにみちた幸福な瞬間であった。しかし、ある時、少年は（具体的に何とは言っていないが）少年らしいある悪戯をしかけた。

「いずれにしてもそれは子どもらしいことにすぎなかった——馬をなでているうちに私はふと、何とそれが私を興がらせてくれることだろうかと思った……。遊びはそのあとも、いつものように続けられた、だが何かが変わってしまっていた。」<sup>7)</sup>

少年の子どもじみた悪戯、おそらく単なる「モノ」としての道具的感触に興味をおぼえたのではないだろうか。その時を境にして、馬の心は少年から離れ、生命の一体感を感じ合うことはもはや二度となかった。少年と馬との関係は、「我一汝」の関係から「我一それ」の関係に変わってしまった。そして、癒しに充ちた幸福な関係はもう二度と取り戻すことができなかった。少年時代に体験した生命の一体感——それがブーバーの「我と汝」論を生み出した原体験であった。

犬や猫に愛情を注ぐことによって、飼い主は計り知れない癒しと喜びを得る。そこには「我一汝」の関係がある。動物だけではない。庭先に咲く色とりどりの花々でも、あるいは窓から見える鬱蒼とした樹木でも、「我一汝」の関係はありうるのかもしれない。黄昏の美しい夕日を見たときの感動、あるいは美しい慰めに充ちた音楽を聴いたときの感動、そこにも「我一汝」の関係がある。さらには、まだ歩けない赤子が母親の顔を見てキャッキヤと笑い、母親を追いかけて抱きついてくる。そこには純粋で幸福な「我一汝」の関係がある。それは、利害損得に汚された、大人社会の複雑な関係ではない。もっと自然で素朴な、しかし根源的な心と心の関係、生命と生命の関係である。ブーバーの「我と汝」論は、こ

うした生命と生命の関係を失いがちな物欲的な現代社会への警鐘なのである。

## (2) 私のなかの二人の私

ブーバーの『我と汝』は次のような文章で始まっている。

「世界は、人間の二重の態度において二重である。人間の態度が二重であるのは、人間にとって根元語が二重だからである。根元語のひとつは《我一汝》である。もうひとつの根元語は《我一それ》である。このように根元語が二つあるからには、人間の《我》も二重である。なぜなら、根元語《我一汝》における《我》は、根元語《我一それ》における《我》とは異なっているからである。」<sup>8)</sup>

私たちは、人に対しても、物に対しても、あるいは自然やさまざまな芸術作品に対しても、心から愛情をもって接する時がある。そんな時、私たちは「我一汝」の関係のなかに身をおく。私たちは共に喜びを共有し、悲しみを分かちあう。人生を共にし、共に現実を共有する。(ちなみに、ドイツ語で「汝」「du」という場合は、心を許しあえる、きわめて親密な恋人や親友・夫婦・家族に対して使う単語(親称二人称)であり、それに対して見知らぬ相手やちょっとした知り合いに対して使う二人称「あなた」は敬称二人称として「Sie」(大文字で始まる)を使う。)

しかし他方、私たちは、常識的な社会人として、仕事上でさまざまな人や物に接し、時には葛藤し、時には傷つく。お互いの人生に立ち入らず、利害損得の価値観にしたがって、あたり障りなく、ある程度の距離をおいてかわる。あるいは、露骨に、人を単なる(非人格的な)「モノ」として扱う場合もある。その時、私たちは「我一それ」の関係において他者にかかわる。

「我一汝」「我一それ」は、どちらが良くてどちらが悪という、道徳的善悪の問題ではない。私たちは、いやおうなく、この2つのいずれかの仕方ですでに人や物に現にかかわっている。ブーバーによれば、「我一汝」のかかわり方をしている時の私と、「我一

それ」のかかわり方をしている時の私は、本質的に別の主体なのだという。

私たちは、すでに夫婦について先述した箇所、「仕事」の価値基準と、「関係」「愛情」の価値基準の違いについて簡単に述べた。一方で「働く」私、「働き者」の私がいる。そして他方では「関係」を喜び、「寄り添う」私がいる。それは2つの異なる価値基準である。「寄り添う」私は、ブーバーの「我と汝」論で言えば、「我一汝」のかかわり方をしている私であり、「働き者」の私は「我一それ」のかかわり方をしている私である。

どの人の「私」も、このように二人の私、「我一汝」の私と「我一それ」の私からなっている。私たちは、この二人の「私」を使い分けている。そして、人によっては、どちらか一方の「私」に比重を偏らせている。

## (3) 「我一汝」と「我一それ」の基本命題

そこで、私たちは、ブーバーの「我一汝」と「我一それ」がそれぞれどのように異なるのか、そこにおける二人の「我」はどう違うのか、ということについて掘り下げて見ていくことにしよう。

両者の違いについて、ブーバーは7つの命題の形で語っている。それをここで紹介し、私なりの説明を付け加える。

① 「《我一それ》における我は《個我》として発現する。」<sup>9)</sup>

モノに対する時の私は「個我」であり、他者への配慮を欠いた自分本位の私、自分中心の私である。

② 「《我一汝》における我は《人格》として発現する。」<sup>10)</sup>

愛する人に対する時の私は、「人格」である。その時の私は、心のすべてをかけて、あるいは魂の奥底から、汝にかかわろうとする。

③ 「《個我》は他の個我から自分を分離することによって発現する。」<sup>11)</sup>

「個我」としての私は、他の個我に対して距離をおく。私は他の個我を観察し、客観的に分析し、そ

の価値を吟味する。

- ④ 「《人格》は他の人格との関係のなかへ歩み入ることによって発現する。」<sup>12)</sup>

「人格」としての私は、愛する人との関係のなかに自己を投入し、相手の心のなかへ自己を委ねる。

- ⑤ 「《分離》の目的は経験（見聞）と利用である。」<sup>13)</sup>

私が自分を他の「個我」から分離する目的は、相手を見聞し、比較し、利用し、支配するためである。それは私の仕事のためか、あるいは衣食住という日常生活の快適さのために行う。

- ⑥ 「《関係》の目的は汝との《触れあい》である。

なぜなら、《触れあい》によって、永遠なる《生命の息吹》がわれわれに触れるからである。」<sup>14)</sup>

汝を愛し汝と関係する目的は、汝の魂との触れあいである。なぜなら、魂の触れあいによって、お互いが《生命の息吹》に触れあうからである。お互いをとおして脈動する《生命の息吹》を実感するからである。「愛する」とは、お互いをとおして「生きている」ことを実感することである。

- ⑦ 「汝との関係を結ぶものは、汝と現実を共にするものである。」<sup>15)</sup>

「我—汝」の関係にある時の私は、今ここに「存在している」という現実、現に「生きている」という「現実」を汝と共有している。今ここを生きている現実、人生の哀しみや喜びや苦しみと辛さを二人して共有する。プーバーの「我—汝」論において、「寄り添い」とは汝とともに人生の現実、人生の悲喜・苦楽を、つまり人生を「共有する」こと、「共に存在する」<sup>16)</sup> こと、「共に生きる」ことであると定義することができる。

#### (4) 「我—汝」と「我—それ」の比較

「我—汝」「我—それ」についての、前述の7つの基本命題をもとに、両者の違いについて少し詳細に見ていくことにしよう。

「我—それ」の私は個我（エゴ）であり、自分の身体的な欲求にもとづいた、自分本位の私、自分中心の私である。「われ思う、ゆえにわれ有り」と言っ

「我—汝」	「我—それ」
私＝人格 ＝生命に対する時の私	私＝個我（エゴ） ＝モノ（対象物）に対する時の私
他者との関係のなかへ自己を投入する 他者との一体感をめざす	他者から自分を分離する 他者に対して距離をおく
生命の息吹に触れあう 魂の触れあい	相手を個性・属性として把握する
人生（悲喜・苦楽）の共有	支配・被支配／所有・被所有利害損得の価値観
（Erleben）体験，出会い	（Erfahrung）経験，見聞
相手の存在そのものを愛する（無条件的愛）	相手の個性・属性を愛する（条件的愛）
相手と自分（人生・生命）の肯定	生きる喜び（充実感）からの阻害
癒し・幸福の享受	癒し・幸福の喪失

たデカルトに始まる近代の自我中心主義は、まさしくこの「我—それ」のエゴイスティックな世界観にもとづいている。そのような個我としての私から見れば、私の周りにあるすべての他者は、私が身体的に生存してゆくための手段となり道具となる。個我にとって、すべての対象は、ドイツ語でいうところの「それ」（es）、非人格的なモノなのである。

この時、個我である私は他者に対して距離をおき、できるかぎり相手の個人生活には立ち入らないようにする。社会的な立場を尊重して、利害損得の価値基準にしたがって、対人関係をこなしていく。

そして、モノとしての私、モノとしての他者は、客観的な対象物として、「個性」や「属性」でもってレッテル化される。「男」「女」、「太っている」「痩せている」、「若い」「年寄り」、「貧乏」「金持ち」、「学生」「先生」、「社長」「平社員」、……。 「我—それ」の関係において、私たちは人を、容姿・身分・性別・性格・職業……といった、個性として、属性として把握し、有用性や優位性でもってその人を評価し峻別する。

愛情についても、同じ価値観のもとに営まれる。男女関係にしても、親子関係にしても、その人にとって、「愛する」とは相手の「個性」や「属性」を愛

することになる。美しいから彼女を愛する。お金持ちだから彼を愛する。そして子どもが生まれたら、愛すべきわが子は「よい子」でなければいけない、「できる子」で「よい学校」「よい会社」に入ってほしいと、同じ（有用性・優位性という）価値観によって子育てを進めていく。その愛情は「条件的愛」だということになる。そうした愛情関係からは「癒し」や「幸福」感は生まれない。夫がいかに「働き者」であっても、彼の家庭の人間関係が「我—それ」によって営まれているかぎり、夫は、そして彼の妻も、彼の子どもも、「今ここ」に「幸福」を感じることができない。「我—それ」の関係が、利用・有用を目的としており、「生きている」という「存在そのもの」ではなく、「存在様態」（個性・属性）に価値をおいているからである<sup>17)</sup>。

それに対して、「我—汝」の関係において、二人は互いを通して「生命」にかかわり、「生命の息吹」にかかわる。そのように「生命」にかかわる主体としての「私」を、ブーバーは「人格」という。人格とは、「関係」において応答し責任をとる主体である。生ある者との関係を慈しみ、応答し、寄り添う私である。そこには「生きている」という実感と喜びがある。お互いの生命に触れあうと同時に、お互いの生命を通してもっと根源的で普遍的な「生命そのもの」、「永遠の生命」に触れあう。

このような「生命の触れあい」を、ブーバーは「出会い」という。私たちは人生のなかで、人に出会い、本に出会い、自然に出会う。それは感動的な瞬間である。「出会い」とは、ただ単に相手と知り合いになるということではない。相手を通して自分のなかのある本質に気づき（自己覚醒）、その気づきをきっかけとして、あるがままの（ただ存在する）自分を受け入れる。「出会い」とはそのような自己覚醒、自己受容の瞬間である。「私は、汝と出会うことによって、真の我になる。すべての真の生は、まさに出会いである」<sup>18)</sup>とブーバーは語っている。

「経験」（Erfahrung）と「体験」（Erleben）の違いもここにある。「我—それ」の関係によって得ら

れる知の営みを、ブーバーは「経験」（「見聞」）という。「人はさまざまな事物の表面界をさぐり歩いて、それらを経験する<sup>19)</sup>。」「地球は丸い」とか「彼の妻は看護師だ」という知識は経験によって得られる知である。それは、見たり聞いたりすることで得られる「対象」（客体）認識である。それに対して、「我—汝」の「出会い」において体得された知の営みを、ブーバーは「体験」という。それは事物についての客観的な知ではない。自分の内面に向き合い、人間の内面に向き合うことによって得られる知である。そして、自分自身の生と死の現実となる知——それが「体験」である。それは客観的な「知識」ではなく、主体的な「智慧」というべきものであろう。

「我—汝」の関係において、私は汝に出会う。「出会い」において、私は相手の人生のなかに自己を投入し、相手との一体感をめざす。それはまさしく「寄り添い」（ブーバーはこういう言葉を使っていないが）である。人生の喜びと悲しみを共有し、人生の苦楽を共有する。そうして、相手のすべてを受け入れ、自分と自分の人生のすべてを肯定する。「我—それ」が相手の人生に立ち入らない孤立的な人間関係であるのに対して、「我—汝」はお互いの人生に立ち入り、悲喜苦楽を共有する人格的な「寄り添い」の関係なのである。

そこに認められる愛情関係は、お互いの個性や属性を愛する「条件的愛」ではない。汝が生きているという、掛けがえのない「存在」そのものを愛し慈しむ。そして相手の長所だけでなく欠点も含めて、相手のすべてを抱きしめ、愛し、寄り添う。「今ここ」にある相手を、そのあるがままの相手を受け入れ、愛する。幸福は完ぺきな人間になることにあるのではない。最良の恋人を見つけることが幸福なのではない。最も大切な生命は、今ここに、「我—汝」において、私たちとともに、存在している。そのことに気づきさえすれば、いつでも誰にでも「今ここに」存在していることが幸福となる。

### (5) 「我一汝」と寄り添い

ブーバーの「我と汝」論を参考にして「寄り添い」とは何かを考えるならば、「寄り添い」とは、まず第1に「生命の息吹」の共有であると言ってよいであろう。「生命」は、生きとし生けるすべての生きものが共有している本質である。どういう姿形であれ、どういうあり方であれ、現に「存在」している、その「生命」に「寄り添う」。私は、相手との関係のなかで、自分の生命に気づき、相手の生命に気づかう。そのとき、私と相手は、単なる利害関係ではなく、純粋に生命を共感し合う関係となる。単なる「個我」（自分本位）であった私が、他の「生命」を慈しみその「存在」に気づかう「人格」へと転換する。

ブーバーは、このような「我一汝」の関係におけるコミュニケーションをとくに「対話」と言っている。「対話」とは単なるおしゃべりではない。自分に向けられた言葉を全身全霊でもって受け止め、傾聴し、責任をもって応答する。「寄り添い」の第2は、「我一汝」関係において交わされる「対話」にあたると言ってよいであろう。

「対話の基本運動は向き合い（Hinwendung）である。われわれは、誰かを見つめ、誰かに語りかけるとき、その相手のほうへ身体を向けるのはもちろんのこと、われわれが彼に注意を向ける度合いに応じ、魂によってもまた彼に<sup>あい</sup>相対するわけである。」<sup>(20)</sup>

「対話」とは、相手に魂をもって向き合い、寄り添う、そのような「我一汝」関係におけるコミュニケーションをいう。それは言葉によるコミュニケーションだけではない、言葉によらない沈黙のコミュニケーションの場合もある。言葉はなく、ただちょっとしたしぐさやまなざしによって癒され救われる場合がある。そして、対話の相手は人間だけではない。動物も、植物も、自然も、そして目には見えない神的存在・霊的存在との対話もありうるであろう。

## 3. キューブラー＝ロスの『死ぬ瞬間』における「寄り添い」

ブーバーの「我と汝」論にもとづけば、「寄り添い」とは「生命」（あるいは「人生」）の共有であり、「生命の息吹」の交感・共有である。そこで交わされる「対話」は、「寄り添い」において交わされる魂の応答である。自分の人生の現実（実存）から離れた客観的な情報のやりとりではない。それは自分の実存に跳ね返り、魂の救いと絶望にも反映するような、生々しい「生き死に」の土俵上で交わされるやりとりである。

そうした「対話」を死の現場において、医療の視点から、初めて実現させた人物が、20世紀後半にアメリカで活躍した精神科医、エリザベス・キューブラー＝ロス（Elisabeth Kübler-Ross, 1926-2004）である。彼女は患者を「人間」として「人格」として扱い、その死を暖かく看取った。患者に正直に病状を告げ、家族にも詳しい情報を伝え、最善のケアを尽くそうとした。患者と共に死の恐怖や不安に向き合い、共に悩み共に悲しんだ。

### (1) キューブラー＝ロスの「死ぬ瞬間」

キューブラー＝ロスの主著『死ぬ瞬間－死にゆく人々との対話』<sup>(21)</sup>は、ターミナル・ケアの古典的名著である。当時、医学は患者の病気を治し、命を生き返らせることに全力をあげていた。治る見込みのない末期ガン患者は、うち捨てられ、孤独に死んでいった。キューブラー＝ロスは、死に直面する末期ガン患者がどのような心理状態にあるか、そしてどのような心のケアを望んでいるのかを、患者との「死の対話」をとおして探った。その成果が『死ぬ瞬間』である。

この本は、医療関係者はもちろん、患者の家族もまた、患者のためにどのように接すべきかを知る貴重な手がかりを与えてくれる。死という生々しい現場のなかで、「我一汝」の関係をいかに築くことができるのかという視点からこの本を読み返すとき、



私たちはこの本から多くの示唆を得ることができる。キューブラー＝ロス<sup>22)</sup>は強調してはいないけれども、この本のなかで私たちは「寄り添い」の具体的な対応とその重要性を学び知ることができる。末期ガン患者が暖かい「死の受容」に至るには、医療関係者の、そして家族の「寄り添い」が不可欠なのである。

キューブラー＝ロスによれば、末期ガン患者は5つの段階を経て死に至る。第1段階は「否認」である。ガンの告知を受けると患者はかならず否認する。第2段階は「怒り」である。自分の病気を否認できなくなると、患者は周囲の人たちに怒りを発散し、あたり散らす。第3段階は「取り引き」である。患者は病気が治るように、あるいはせめて死期が延びるようにと、神と取り引きをする。第4段階は「抑鬱」である。病気が治る見込みがないと知ると、患者は絶望して抑鬱状態に陥る。そして第5段階は「受容」である。抑鬱状態を経て、ようやく患者は死を受容し、周囲の人たちに感謝の言葉を残して死んでいく。

## (2) 「死ぬ瞬間」における「寄り添い」

「寄り添い」という言葉は使われていないけれども「寄り添い」と言える対応が求められるのは、第4段階「抑鬱」と第5段階「受容」においてである。まず第4段階「抑鬱」について、キューブラー＝ロスの興味深い叙述を以下に引用する。

「(この抑鬱には)励ましも力づけも役に立たない。患者に『物事の明るい面を見なさい』と言ってはならない。それは、彼らに『迫り来る死のことを考える』と言うに等しいからである。……患者は今、愛する一切の事物、一切の人々を失おうとしている。……この抑鬱段階のとき、『悲しむな』としつこく言わず、ただ黙ってそばに掛けていてくれる人たちに、患者は感謝することができる。……準備型の嘆きに対して、言葉はまったく不要である。……言葉によらず、むしろ手を握るとか、髪をなでてやるとか、あるいはただ黙ってそばに座っているだけのほ

うがずっと望ましい。……患者が死の受容と平和のうちに死ぬためには、この抑鬱が必要なのであり、ためになるのである。」<sup>22)</sup>

もはや死を回避することはできないと知って、患者は悲嘆と絶望に打ちひしがれる。この世から、自分ひとりが去らなければならない。患者は周りからの語りかけに反応しなくなり、口を重く閉ざす。絶望して抑鬱状態にある患者に対して、私たちはどのように接することができるのだろうか？ キューブラー＝ロスは、何もしゃべらなくてよいのだと言う。「言葉はまったく不要である」。言葉によらず、「手を握る」「髪をなでてやる」、そしてただ「黙ってそばに座る」——それだけでよい、とキューブラー＝ロスは助言する。それは、まさしく「寄り添い」に他ならない。

第5段階「受容」において、患者は人生の終わりを受け入れ、自分の死を静かに見つめる。この段階でも、「寄り添い」が、患者に対する唯一のかかわり方として、強調される。

「受容を幸福と誤解してはならない。受容にはほとんど感情がない。……患者は、外部のニュースに心を掻き乱されたりせず、そっと一人きりにしてほしいと望む。いわば『テレビが消される時期』である。この時のコミュニケーションは、もはや言葉ではなく、沈黙である。患者はただちょっと手を動かし、『しばらく掛けなさい』と招くだけである。彼は私たちの手を握り、『黙って座っていてください』と頼むだけである。この沈黙こそが有意義なコミュニケーションとなる。私たちは一緒に窓外の小鳥の声に聞き入る。私たちがそこにいるということで、患者は私たちが最期の時まで身近にいてくれるだろうとの確信を持つ。私たちはただ患者に、……もう何もしゃべらないでいいのだということ、そして私たちはここにいて、彼は一人ぼっちではないということ、確信させてやるだけでよい。私たちのかすかな手の圧力、表情、枕への寄りかかり、それらは多くの『やかましい』言葉よりも雄弁なのである。」<sup>23)</sup>

死の「受容」段階に至っても、「寄り添い」が重

要なかかわり方なのだと、キューブラー＝ロスと言う。「沈黙」が有意義なコミュニケーションとなること、「かすかな手の圧力」、思いやる「まなざし」と「表情」、「枕への寄りかかり」、「黙って側に座る」。言葉はいらない。何かをしなればと思う必要もない。家族は患者の「死」を受け入れ、その「死を分け持つ」。そばにいて、共に時間を共有すること、それだけでよいと、キューブラー＝ロスは助言する。ここでの「寄り添い」とは、ただ患者と「時間を共にする」「空間を共にする」こと、そして最期まで看取るという意思表示である。

#### 4. 看護における「我と汝」

私たちは、ブーバーの「我と汝」論、およびキューブラー＝ロスの「死ぬ瞬間」をとおして、「寄り添い」とはどのようななかかわり方なのか、を見てきた。ブーバーの「我と汝」論において「寄り添い」とは（１）「生命の共有」「人生の共有」であり、また（２）「魂との向き合い」としての「対話」である。そして、キューブラー＝ロスにおいて「寄り添い」とは、「沈黙のコミュニケーション」であり、「ただ黙ってそばに座り」、患者の「死を分け持ち」、人生の最期の時を共有することであった。

このような「寄り添い」は、具体的に看護の現場においてはどのように実践されるのか。それは、具体的な看護実践においてどのような有効性をもつか。そしてその結果、「我―汝」の関係はどのような方向へと進展していくのか。それは、ブーバーの「我と汝」論を理解する上でも、また「寄り添い」の意味について理解する上でも、大変に興味深いテーマである。

私たちは、ある看護実習生の実例をとおして、一つの理想的な「寄り添い」の事例を見出だすことができる<sup>24)</sup>。

看護実習生が就いた患者は62歳の末期胃ガンの男性患者である。病巣が広がっているため、もはや手術は不可能な状態であった。患者は病状の悪化と

ともに自らの死期を悟っていた。患者に初めて就いた時のことを実習生は次のように報告している。

「受け持って2日目ぐらいから急にげんなりしちゃって、本当に私は手が出せなくて、末期の人って実際何をやっていいかわからないという感じで遠くから見ていました。」<sup>25)</sup>

実習生は患者に対して距離をおいて見ていた。それは、ブーバーの言う「我―それ」のかかわり方である。彼女は死に直面している患者に対して接する術を知らなかった。「我―それ」のかかわり方では、人は本質的に「死に向き合う」ことができないということであろう。死の「対話」、死に近づく人への「寄り添い」は、人格的な「我―汝」の関係でなければ成立しない。だが、看護において、それは具体的にどのようななかかわり方なのであろうか？

万事休していた時、実習生の指導教員がやって来た。教員は患者のそばに座り、ぐったりと横になった患者の背中を無言でさすった。すると患者が少しずつ話を始めた。教員は患者の背中をさすりながら、ただ話を聞いて、うなずき、相づちを打っていた。やがて、患者は涙をぼろぼろ流し始めた<sup>26)</sup>。ただ「背中をさする」という行為をきっかけとして、一瞬のうちに「我―汝」関係への転換が起こったのである。

それを見ていた実習生は、さらに続けてこう報告している。

「私それを見てて、『ああそうか、こんなことでもいいのか』と思ったんです。あれは衝撃的な出来事でした。全然先が見えず、自分で何をやっていいのかわからないときに、本当、すうっと道が開けたって感じ。ああ、私にもできそうなのが1つ見つかった、という感じでした。」<sup>27)</sup>

それは、私たちがキューブラー＝ロスの『死ぬ瞬間』において見たシーンである。何もしゃべらなくていい、ただ黙ってそばにいて、身体に触れる、話を聞く。そうした「寄り添い」の動作が、「我―汝」の関係を生み出すスイッチとなる。実習生はそのことを目の当たりにし、体験した。

「我―汝」の関係が生じたことによって、実習生

と患者のやりとりは一変した。

「K氏（患者）は明るくなりましたね。それから私は毎日椅子に座って、じっと視線を合わせて、話を聞きました。あのよぼよぼの目でも、輝いてますね。機嫌のいい時はすぐにわかります。辛いときはうんと辛い顔してるし、その人の身体に触れ、その人との関係が近くなるというのがありますね。」<sup>28)</sup>

「我—汝」の「対話」が出来たことによって、今生きている「辛さ」や「悲しさ」や「嬉しさ」を共有する。まさに「生命」の共有が行われている。しかし、「我—汝」の関係がもたらす意義はそれだけにとどまらなかった。

「毎日、(K氏は)私を待っていてくれた。元気が出た。毎日患者に引っ張られるように看護し、それでいて自分自身が何かしら元気になり、意欲がわいてきた。」<sup>29)</sup>

「生命」の共有は、看護する側も、看護される側も、双方に元気をもたらし、いや、それだけではなかった。

「K氏の死は暖かい死でした。K氏はだんだん衰弱していましたが、家族の皆が暖かく見守っている中での死でした。こういう暖かい死があるんだというような感じを受けました。私にとって初めての『死』でした。K氏自身が自分の生きてきた道をすごく良かったと思っていて、家族もそれを認めている。家族がK氏と一緒に『あの世』の話をするんですよ。『今に私も追いかけて行くから』と、皆で受け止めていましたね。」<sup>30)</sup>

「我—汝」の関係ができたことによって、患者の人格に変化が生じた。死の闇に打ち沈んでいた患者が、死に向き合い、死を受容し、それまで歩んできた自分の人生を受容した。『死ぬ瞬間』でいわれる「抑鬱」段階にいた患者が、「我—汝」関係の生成によって、「受容」の段階へと転回した。そして、患者だけでなく、その家族もまた死に向き合い、患者の死を暖かく見守り受容した。死に直面したことで、患者も、家族も、人格的な変化を遂げたのである。

そして、「我—汝」の関係が人格的な変化をもた

らしたのは、患者とその家族だけではなかった。看護実習生もまた、「我—汝」の関係をとおして、人格的な変化を体験した。

「私は、K氏の死への看護を土台にして、すごく変わったなあと自分で思います。私は看護婦として働きたい、と思うようになりました。死ぬ人の人生の記憶の中に『があっ』と自分を入れたいと思いました。」<sup>31)</sup>

実習生は、「我—汝」の関係を体験したことによって、自分の職業を受け入れ、人生を受け入れた。「看護師」を、単なる職業としてではなく、彼女自身の「人生の現実」(生き役)として背負ったのである。そしてこれからも、看護する側の人間として、患者との関係に積極的に自己投入しようと、人生の決断をすることができた。

このように、相手のそばに座り、相手の身体に触れたり、背中をさすったりする。相手の話をただ聞き、相づちを打つ。こうした「寄り添い」によって、「我—それ」の冷淡な関係は、「我—汝」の生命豊かな関係へと転換する。「我—汝」の関係が生じ、「生命」の共有を体感・体験したことによって、我も汝も、人格的な変化を遂げる。人格的变化を遂げたことで、我も汝も、あるがままの自分を受け入れ、存在そのものを受け入れる。そして、静かに死に向き合い、人生に向き合い、それまで歩んできた人生をそのまま受容する。

ブーバーの『我と汝』をとおして「寄り添い」を改めて見直したとき、そこには人間存在の豊かな深相が見えてくる。マルティン・ブーバーに限ったことではないが、人間関係を独自の目線で掘り下げていく(哲学的・心理学的)人間学の先人たちの思想をもとに「寄り添い」について見直してみることは、興味深い探求になる。

## 注

- 1) (内閣府ホームページ) 平成26年度「結婚・家族形成に関する意識調査」報告書, 「9. 将来の結婚意向」, 37頁. (<http://www8.cao.go.jp/shoushi/>)

- shoushika/research/h26/zentai-pdf/)
- 2) (PRTIMES ホームページ) パートナーエージェンツ QOM 総研「夫婦の共通点」に関するアンケート調査. (<https://prtimes.jp/main/html/rd/p/000000339.000006313.html>)
- 3) (APTF ホームページ) 機関誌「真の家庭」, 185 号 (2014 年 3 月), 愛の知恵袋 71. ([http://www.aptf.gr.jp/contents/truefamily/mm185\\_2.html#index\\_obj](http://www.aptf.gr.jp/contents/truefamily/mm185_2.html#index_obj))
- 4) Martin Buber, *Ich und Du*, Insel-Verlag, Leipzig, 1923. 現在, 入手可能な訳本は 3 種類ある. ①ブーバー『孤独と愛—我と汝の問題—』, 野口啓祐, 創文社, 1958 年. ②ブーバー『我と汝』, 田口義弘訳, ブーバー著作集第 1 巻「対話的原理 I」所収, みすず書房, 1967 年. ③ブーバー『我と汝・対話』, 植田重雄訳, 岩波文庫, 1979 年.
- 5) Martin Buber, *Zwiesprache*, Schocken Verlag, 1932. 邦訳は次のものを使用している. ブーバー『対話』, 田口義弘訳, ブーバー著作集第 1 巻「対話的原理 I」所収, みすず書房, 1967 年.
- 6) ブーバー『対話』, 227 頁.
- 7) ブーバー『対話』, 228 頁.
- 8) ブーバー『我と汝』, 田口義弘訳, ブーバー著作集第 1 巻「対話的原理 I」所収, みすず書房, 1967 年, 5 頁.
- 9) ブーバー『我と汝』, 84 頁.
- 10) ブーバー『我と汝』, 84 頁.
- 11) ブーバー『我と汝』, 84 頁.
- 12) ブーバー『我と汝』, 84 頁.
- 13) ブーバー『我と汝』, 84 頁.
- 14) ブーバー『我と汝』, 84 頁.
- 15) ブーバー『我と汝』, 84 頁. ただし, この箇所  
の訳は, 野口啓祐訳 (ブーバー『孤独と愛—我と汝の問題—』, 創文社, 1958 年, 94 頁) によって  
いる.
- 16) ブーバー『我と汝』, 85 頁.
- 17) ブーバー『対話』, 85 頁.
- 18) ブーバー『我と汝』, 18 頁.
- 19) ブーバー『我と汝』, 8 頁.
- 20) ブーバー『対話』, 226 頁. ただし, 当訳本では,  
ここでの“Hinwendung”は「対向」と訳されているのを, 筆者は「向き合い」と訳した.
- 21) Elisabeth Kübler-Ross, *On Death and Dying*, London and New York, 1969. 本稿での日本語訳は次の本によっている. キューブラー＝ロス『死ぬ瞬間—死にゆく人々との対話—』, 川口正吉訳, 読売新聞社, 1971 年.
- 22) キューブラー＝ロス『死ぬ瞬間』, 124-126 頁.
- 23) キューブラー＝ロス『死ぬ瞬間』, 147 頁.
- 24) 鈴木正子『生と死に向き合う看護—自己理解からの出発』, 医学書院, 1990 年, 43-46 頁.
- 25) 鈴木正子『生と死に向き合う看護』, 43 頁.
- 26) 鈴木正子『生と死に向き合う看護』, 44 頁.
- 27) 鈴木正子『生と死に向き合う看護』, 44 頁.
- 28) 鈴木正子『生と死に向き合う看護』, 44 頁.
- 29) 鈴木正子『生と死に向き合う看護』, 45 頁.
- 30) 鈴木正子『生と死に向き合う看護』, 45 頁.
- 31) 鈴木正子『生と死に向き合う看護』, 46 頁.